View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

安田女子大学紀要　40，81－90　2012.

イメージ画から見た青年期の内的世界

小　嶋　由　香

The Inner World of Adolescence Which Appears in Drawings

Yuka Kojima

は　じ　め　に

「こころ」を言い表そうとする時，私たちは様々な言葉を用いて説明をする。それは喜びや悲しみ，怒りといった一つの感情として名づけられることもあれば，憂鬱さや高揚感のような気分として言い表されるかもしれない。こうした気分や感情という一時的なものを「こころ」として表現することもあれば，自分自身のあり方としてある程度一貫性を持った性格もまた「こころ」であろう。形を持たない「こころ」を表現する時，私たちはそれに言葉で名付け，語る。さらに心理学では「こころ」を捉えるために，数に置き換え，統計的に分析するなど，さまざまな試みがなされてきた。ただ私たちの「こころ」の持つ複雑さや奥行き，移り変わりは，言葉や数では表しきれないこともまた事実である。そこで本稿では，「こころ」を表現する手段の一つとしてイメージ画を用い，そこにどのような描き手のこころの有り様や描き手の生きる世界が現れるのかを考えてみたい。

問　題　と　目　的

青年期とは心理的にも身体的にも，子どもから大人へと変わりゆく過渡期であり，この時期に私たちはさまざまなこころの揺れを体験する。そして，自分とは何者であるのかが問われる時期であり，ライフサイクル上の他の時期に比べても，自分の内的世界への深い関与が生じやすい。Erikson（1950）は青年期の心理社会的危機として，自分とは何者であるかが問われるアイデンティティの形成を挙げている。しかし，このアイデンティティの形成には，当然のことであるが，その時代の社会的な価値観や文化的土壌の影響を避けて考えることはできない。アイデンティティの基盤である心的構造の成り立ちを考えてみると，これまで日本人の心的構造と西欧のそれとを比較する論考が多くなされてきた。例えば，河合（1982）は日本神話をヒントとし，日本人の心的構造を中空構造と述べた。河合は，西欧のキリスト教神話が唯一絶対の男性神を中心とする構造に対して，日本神話では，男性と女性，上と下，左と右など，多くの対立の中心に中空が存在し，バランスを保っている構造であり，それが日本人の心的構造を形作るとした。

また鑪（2003）も同じく，日本人の心的構造の中核の空洞に注目し，西欧と対比させて考察している。鑪は日本人の自我においては，自我の中核的構造というより，自我の表層が発達し，強靭になると指摘し，この部分を皮膚自我（skin-ego）とした。そして，内的には一種の空洞，な

いしは流動的な，どこにも自在に変化して，順応していく液体のようなアモルファスな状態がうまれると述べ，これを自我のアモルファス構造と呼んだ。このように日本人の自己意識は中核となる確固たる自我が形成されにくく，外界との微妙なバランスの上に成り立っていることが指摘されてきた。

それでは，このような日本人的な心的構造を背景に持ちながら，他者との関係にこころを揺さぶられやすく，自分が何者であるかに迷い悩む青年期に，彼らは実際にどのような内的世界を体験するのであろうか。本稿では青年期の内的世界をイメージ画により検討し，現代の日本の若者の心的構造の特徴について考察したい。

方　　法

調査対象者　調査対象者は女子大学生192名である（年齢19～22歳）。

調査手続き　講義中に集団法で実施した。B2 の白い上質紙を配布し，次のような教示でイメージ画を描いてもらった。教示は「あなたのこころをイメージして絵で描いてください。必要に応じて，絵の説明も付け加えてください。」であった。用いた筆記用具は黒色鉛筆であった。

分　　析　分析に当たっては，以下の５つの視点から，描かれた絵をカテゴリー化し，分類した。分析の視点は，①中心となる自己の描かれ方，②中心となる自己の周辺および分離したものの描かれ方，③自己の分化の程度，④動きや時間性の有無，⑤塗りつぶしの有無と描線の強弱であった。

結 果 と 考 察

得られたイメージ画を５つの分析指標をもとに，描画の共通性と差異性に注目し，カテゴリー化した結果，大きく10のタイプに分類することができた。なお，今回の調査がイメージ画であるため，記号的なものから，写実的，漫画的なものまで，さまざまな描き方が見られた。写実的な内容や複雑な描画，また抽象的な描画の場合，描画の意図するものが，単純に一つのカテゴリーに分類できない場合も見られた。本稿ではそれらの重複する部分や，数量的な分類からは一旦離れ，最も単純な形でそれぞれのタイプごとに基本構図を図示することとした。なお実際にイメージ画の説明として記された言葉は「　」で示した。

1.　ゆるやかにつながる複数の自己

まず主体として描かれる自己は円を用いて描かれることが多くみられた。それらのうち最もシンプルな描かれ方をするものとしては，複数の円が並列する並列型（図１）が挙げられる。並列型の場合，それぞれの円に，「学校」「友だち」「バイト」「家族」などと書かれ，対象や場によって異なる自己が現れるように体験されていることがわかる。他には，「明るい」「さみしがり屋」「リラックス」「こうしないといけないという気持ち」など，一つ一つの円が気分や性格を表す場合もみられた。

さらにそこから切り離された部分が現れるのが図２に示した分離型である。この分離した部分には「完全な無意識」として自分でも意識できずにいる部分を指す場合と，「１人でいるとき」「他

者にはふれさせない」など，他者に見せない部分として描かれる場合が見られた。この並列型や分離型の主要部分は，複数の異なる自己がゆるやかにつながりを持っており，場に応じて違う自分がいるように感じていても，それらが完全に分離して切り離されているわけではない。ただ，中核となる自己は形成されておらず，どれもが同じように並列しているのが特徴的である。

次に，円の中にさらに小さな円が描かれる同心円型（図３）を挙げる。この場合，中央の円には「本音」「本心」「自我」などが位置し，それを包み込むように，さらに外側に円が描かれる。外側の円が鎧のように描かれることもあれば，変形して中心の円を包み込む腕として描かれることもあった。つまり，外側の円は中心の「本心」を外界に直接触れさせずに守る膜のような働きをするといえる。やまだ（1988）の幼い頃の母と自分をテーマとしたイメージ画の研究でも，基本構図として「包む母と入れ子の私」と称される同心円の構図が見られた。ここでは入れ子として表現された私が，母の身内にすっぽりとあたたかく包まれ，外側から守られているというイメージが現れていた。そして，母の外側の空間に広がるのは「世間」であるとされている。やまだの研究では，「幼い頃の私」が母に包まれ，守られている様が描かれているが，本稿の場合，「今の私」を表したものであるため，外界との境に母が登場することはない。今や母に守られる幼い自分ではなく，自分自身で世間から身を守る必要がある。厳しい世間から身を守る適応策として，彼女たちは場に応じたいくつかの自己を作り出し，それをゆるやかに保ち，また本当の自分を世間に直接触れさせないように，抱え，守っているのであろう。

次に，図４で示した回転型は，いくつかの分化した自己が，ゆるやかにつながりながら，それらの一部が一時的に表層に現れる様を描いたものである。これは垂直軸に回転する場合もあれば，平面でルーレットのように回転する場合も見られた。さらに図５の波型は，気分の変化を流線型で表現し，気分の浮き沈みが強調されたタイプである。この中で下層に位置するものを「ボーっ

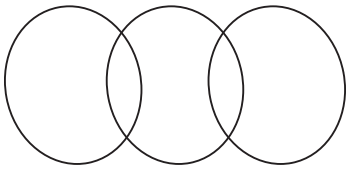

図１　並列型

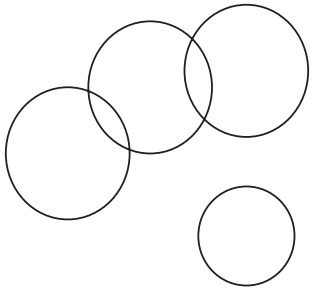

図２　分離型

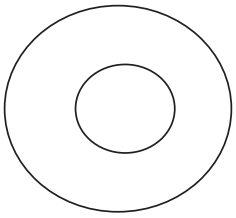

図３　同心円型

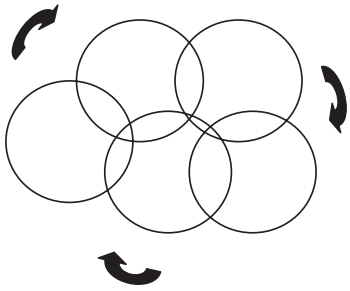

図４　回転型

としている」と表現する場合も，「嫌なことがあったとき」と表現する場合も見られた。

これらの円の重なりや波などで，内的世界を表現する場合，少なくともいくつかの分化した自己の側面，気分の変化が認識されている。それに対して，図６で示したのは，内的世界が非常に未分化なタイプである。このタイプは，大小入り混じった複数の円が浮遊しているように描かれることが多く，説明も「ふわふわ」「何も考えていない」「いつももやもや」「はっきりしない」など，感覚的な表現が多く，内的世界の未分化さが特徴である。これまでのタイプがゆるやかに重なる円が描かれていたのに対し，ここではそれぞれの円が重なり合わずに浮遊している。また筆圧も薄く，消え入りそうな印象を受ける。

さらに内的世界の未分化さが見られる別のタイプとして，図７に示した葛藤混乱型がある。これは，ぐちゃぐちゃに塗りつぶされた図で，「ぐるぐる絡まっている」「何がしたいのかわからなくてモヤモヤ」などと表現されている。この葛藤混乱型は，未分化型と同様，自己の内的世界が分化されていないが，そこに混乱や葛藤が体験されているのが特徴であり，黒く塗りつぶされた様子からは，怒りともつかない，強い攻撃性も窺われる。

2.　外界からの圧力

同心円型で述べたように，本稿で描かれたイメージの多くに，外界と自分の間に何らかの力動が描かれている。この外界との関係が特徴的に表されているのが，次に挙げる外界圧力型（図８）である。このタイプは，中心にまとまりをもった自己があり，その外側から何らかの圧力を受けている様子が描かれている。基本的なパターンとしては，外側から自己に向けられた何本もの矢

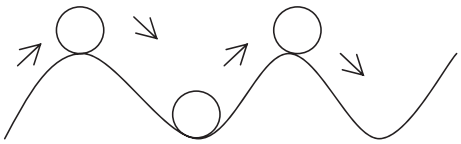

図５　波型

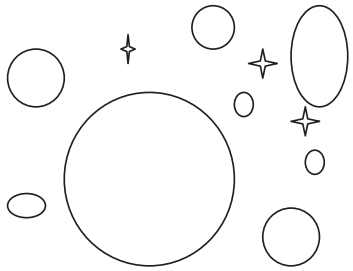

図６　未分化型

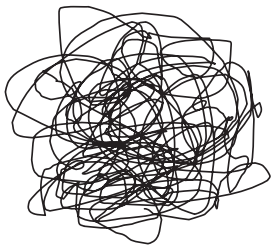

図７　葛藤混乱型

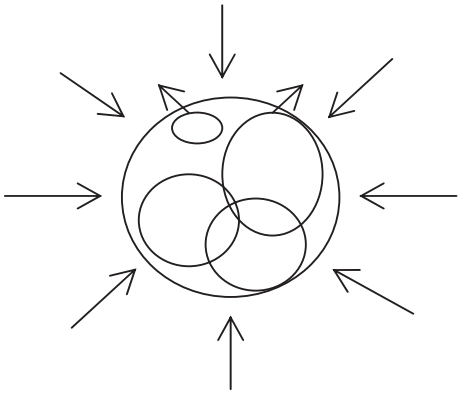

図８　外界圧力型

印として，外界からの圧力が表されている。この外側からの圧力は，「外界」「人にどう見られるか」「周りの意見」「働け！」「親からの望み，言い分」「我慢」「友達からの要望」「情報」「刺激」「理想」「現実」「欲望」「人の気持ち」「悩み」「自分の気持ち」「メディア」などの言葉が添えられている。このように，自己に向けられるものは，親や友だちという具体的で現実的な他者の要望という圧力もあれば，メディアや情報など社会的な圧力もある。さらに，理想，欲望のように，本来自己の内から発すると思われるものも，並記されている。おそらくここでの理想や欲望は，彼女たちにとって内側にあるというよりは，自らをコントロールしようとするもの，もしくはコントロール不能のものであり，自我違和的に感じられるものなのであろう。またそれは理想や欲望が，真に内的に発動したものではなく，親や社会といった他者との同一視から生じているためかもしれない。

この青年期における他者との同一視の変容を，認知構造発達理論（constructive-developmental theory）として提唱した Kegan の理論（Kegan,1979, 1982, 1994; Kegan, Noam, & Rogers, 1982）をもとに，齋藤・杉本・亀田・平石（2011）は，青年期の自己の構造発達を検討している。Kegan の構造発達理論は，主体と客体の均衡に注目したものであり，構造発達段階の発達が主体－客体均衡の変容により引き起こされると考えられている。そして，表 1 に示されたように，ある段階で自己の中で認識の枠組みの根幹にあり，客観的に思考できなかったもの（ある段階の主体）が，自己の中で新しい認識の枠組みに位置づけられることで，自己が客観的に思考できるもの，つまり次の段階の客体に移行するとされている（齋藤ら，2011）。

ここで青年期にあたるのは，第 3 段階である対人関係的な自己（interpersonal self）から第 4 段階のシステム的な自己（institutional self）への移行段階である。第 3 段階から第 4 段階へと移行するにあたり，内在化された他者の視点が自己の感情や行動に及ぼす影響は相対的に小さくなっていき，自己の感情や行動の責任は自らのものになっていくとされる。そして，第 3 段階では，両親，権威者，本，学問など他者の意見を無批判に受け容れ，自己の考えとしている段階から，第 4 段階では，他者の意見を無批判に受け容れず，自己の基準で判断することができるようになるのである。本稿の対象者の多くは，この第 3 段階である「対人関係的な自己」に位置しており，

表 1　Kegan の構造発達段階（齋藤・杉本・亀田・平石（2011）より抜粋）

Kegan	年齢段階	主　　体	客　　体
0.　未分化な自己	乳児期	反射（感覚，運動）	なし
1.　衝動的な自己	幼児期	衝動，知覚	反射（感覚，運動）
2.　尊大な自己	児童期	欲求，関心，願望	衝動，知覚
3.　対人関係的な自己	青年期前期・中期	対人関係，相互性	欲求，関心，願望
4.　システム的な自己	青年期後期成人期	創造者的感覚，アイデンティティ精神的統制，イデオロギー	対人関係，相互性
5.　個人間相互的な自己	成人期以降	個人間相互性，自己システム同士の相互浸透能力	創造者的感覚，アイデンティティ精神的統制，イデオロギー

外界からの影響に大きく揺さぶられる時期であると考えられる。そのため，外界から向けられる様々な思いや期待に対して，適度な距離をもつことができず，過剰に同調したり，過度な反発が生じやすいのではないだろうか。

さらに，鑪（2003）は日本人の心的構造として，周囲の状況を判断し，自分の意見や主張より，周囲を重要視すること，出来事の論理性よりも，集団の協調性を前提として生活をすることで心的な安定を得てゆくと述べた。そして個別的に構造化した硬さをもたず，流動的に周囲にあわせることは重要な集団への適応機制であるとし，図９のように表した。図９に示されたように，日本の場合，場からの圧力，場による支配が強い。欧米の場合それに比べて，中核的自我と自我境界を鮮明にした自我構造であるとされている。日本の場合，対人関係の場の力動性に敏感にならざるを得ないように人間関係が展開しており，対人関係の性質や力動性に注目することを強制されている。そのため，日本人の自我においては，自我の表層レベルにおける対人関係の力動性への敏感性や感度が培われねばならず，この敏感性や感度が高く，柔軟であればあるだけ，対人関係の文脈における適応力が高くなるとした。そして先に述べたように，鑪はこうした日本人の心的構造が，内的には一種の空洞，ないし流動的な，どこにも自在に変化して，順応していく液体のようなアモルファスな状態がうまれるとし，これを，自我のアモルファス構造と呼んだ（図10）。本稿で見られた外界圧力型の場合，鑪が述べたように，日本人の心的構造の特徴である対人関係の力動への敏感さが顕著に現れている。これは他のタイプにも共通に見られる特徴でもあり，他者やその場の力動を敏感に読み取り，その要求に応えようとすることは，日本人的な心的構造であると同時に，Kegan で言われる青年期的な「対人関係的な自己」の特徴が重なり合っていると考えられる。

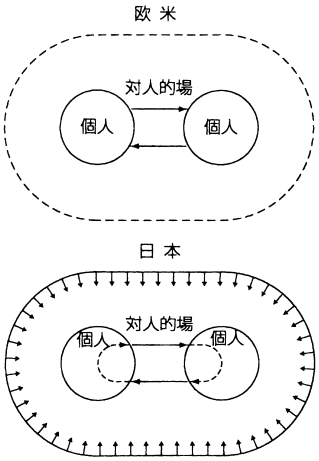

図９　場の力動に支配される対人関係（鑪，2003）

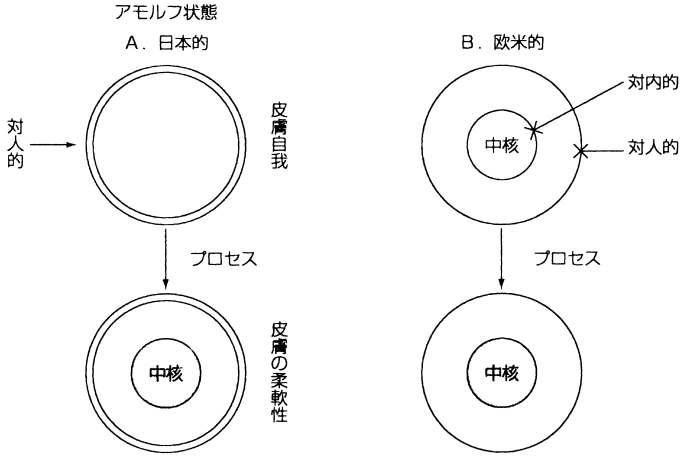

図10　アモルファス的自我と中核自我（鑪，2003）

3.　場に応じて使い分ける自己

外界圧力型（図８）には，外界からの圧力に対する自己側からの反応として，外に向かう小さな矢印が加えられている例が複数見られた。この矢印には，「友達への建前」「たまに拒否」「見栄を張っている部分」「（他人が）羨ましい」などの説明が加えられていた。これは外界から自己

に向けられた様々な圧力や要求に対する反応といえる。ここでの反応は，本音ではなく建前であり，対人関係を円滑に進めることへの敏感さや，見栄や羨望という，表向きの自分を見せたり，他者との関係でより良い自分を見せたいという思いが現れている。ここからわかることは，彼女たちにとって，本音と建前は異なること，そして他者に見せる自分とは別の自分があることが明確に認識されているということである。

この本音と建前や，他者により良い自分を見せようとする側面がより強調して表されたのが，図11に示した二面性型である。このタイプは他のタイプとは異なり，白と黒という色を用いての表現が含まれているのが特徴的である。ここで表わされる白い側面は「表に出ている感情」であったり「偽（外面）の自分」「天使」「良心・理想」「表」など，自己の善の側面，他者から見た良い自分であり，同時にそれは偽りの自分とも体験されている。それに対して黒い部分には「本心」「本当の自分」「悪魔」「願望」「裏」などと表わされており，悪の部分が本当の自分として体験されている。

Winnicot（1965）は，侵襲的な母親との関係で，本当の自己を発展させることができないまま，母親のひとりよがりな侵襲的態度に服従する反応によって形成された人格を「偽りの自己 false self」と呼び，これは親への強すぎる同一化によって形成されるとした。本稿で描かれた二面性のある自己像も，この Winnicot の述べる偽りの自己のように，親など他者の意図を汲み取り，それに過度に同一化して振舞うことで生じるものと考えられる。裏と表というように，極端に分離した自己は，他者に見せる良い自分として振舞う際には，自分の中に生じたさまざまな思いを抑圧し，一面的に振舞うことになる。そのためか，ここで表現される裏の自分には，どこか自分自身に向けられた攻撃性であったり，罪悪感を抱いているような印象を受ける。

また，この二面性型では内と外という心理的な構図が，二項関係，対立構造として表現されている。この良い－悪いという対立構造は，Klein（1952）の提唱した良い対象－悪い対象を彷彿とさせる。Klein は，乳児が対象を全体として体験できず，「良い対象 good object」と「悪い対象 bad object」として，妄想のなかで分裂させるとした。そして発達に従い，幻想の中で良い対象と悪い対象が別々のものであったのが，一人のなかの良い側面，悪い側面として全体対象として捉えることができるようになる。この全体対象へと移行する際に，自分がよい対象を傷つけたのではないかという喪失感や絶望感を感じ，抑うつ不安を体験する「抑うつポジション depressive position」といわれる段階があり，この不安に耐えることが自己や対象を全体として捉える能力の発達に重要であるとされている。そして，ここで不安を避けようとするあまり，自己や対象を部分対象としたまま分裂させたり，対象の理想化を続けることは，内的な成熟の妨げになるとされている。自己の内的世界を二項関係で捉えることは，人生早期の内的対象を形成する段階と通じるものがあるのかもしれない。本稿で描かれた自己の二面性を，乳幼児期の対象関係の発達を表した理論に単純に置き換えて読み解くことはできない。彼女たちは少なくとも，自己の中の二面性を意識化し，図示できている段階で，自己の複雑さに向き合っているといえる。しかし，青年期というアイデンティティ形成に挑む段階になり，彼女たちは他者との関係の中で新たな自己を形成しようともがく中で，人生最早期と同じ心理的課題を繰り返し体験しているのかもしれない。Erikson（1950）は，青年期に人は「以前に経験した戦いの多くに再度挑戦しなければならない」と述べた。そしていまだ不確かな社会的役割の混乱から，自分自身が分裂するのを防ぐために，恋愛の相手や英雄に対する過度の同一化が生じるとしている。図８で示した外界圧力型や二面性型に見られる，他者の目が過剰に意識された状態というのは，このアイデンティティ形成の途上

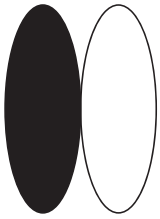

図11　二面性型

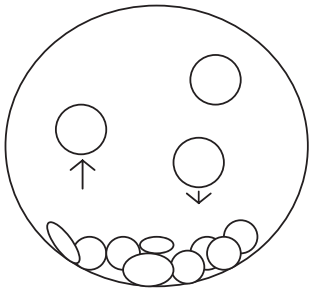

図12　水槽型

で生じる青年期特有の内的世界を表しているとも考えられる。

4.　下層に溜まり土台となるもの

最後に紹介したいのは，アイデンティティ形成の途上としての内的世界を特徴的に描いたタイプである（図12）。このタイプでは，大きな円の中に小さな円が浮き沈みする様が描かれている。このタイプの中に「心の水槽」とタイトルがつけられていた事例が見られた。水槽という器がこころを表し，水の中に自分の思いが浮き沈みしていく様が描かれていたことから，このタイプを水槽型と呼びたい。ここで，下に沈んでいくのは「イヤなこと」「辛いこと」「ドロドロとした気持ち」と表わされている。そして，下に溜まっているものについて，別の事例では，次のような説明が加えられていた。

“自分の心の中にたくさんの「思い」があって，嫌だと思ったりしたことは抑圧して底にためこむ。「忘れたい」じゃなくて，「嫌なことはいつか思い出になって自分の基礎となる」と考えるから，底にためて土台を作ろうとする。”

他のタイプが，外界からの影響を受けやすく，それにいわば振り回されるような印象があるのに対し，この言葉からは，ネガティブな体験は意識の奥に溜まっていくが，それが自分の土台となり，さらに自己形成へとつながるという見通しがもたれていることがわかる。つまり，このタイプは，自分の中に生じるネガティブな感情も切り捨ててしまわず，自分の心の奥に抱えており，こころの揺れによってはまた奥にあるものも，表装に浮き上がりうるような状態である。これは自分の体験が土台となり，今後の自分が形成されるという青年期のアイデンティティ形成のあり方を示す一つの例といえるだろう。

お　わ　り　に

私たちのこころを何らかの構造を持ったものとして仮定し，理解する枠組みは，Freud の局所論をはじめ，様々に論じられてきた。本稿では「こころ」をテーマにしたイメージ画をもとに，青年期の心的構造を読み解いてきた。そこで明らかになってきたのは，現代の青年が，外界からの要求に敏感に反応し，場や対象によってさまざまな自己を使い分けている様子であった。そしてある者は，本音と建前，裏と表というように，対立する二つの自己の存在を感じている。これ

らに共通するのは，河合や鑪が述べてきたように，中核となる明確な自己は存在せず，外界に敏感に反応し，あらゆるものの均衡を保とうとする日本的な心的構造である。これは日本文化の特徴ともとることができるが，青年期という，自己の基準が不明確で，他者との同一化が生じやすい時期の特徴とも考えられる。

しかし，注意しなければいけないのは，自己の二面性が強固になりすぎることや，場に応じて使い分ける自己ばかりが肥大化し，「自分がない」「自分がわからない」という状態に停滞してしまうことである。康（2006）は，若者が集団への過剰適応により，表面的なペルソナが肥大化し，中核となる自己が希薄化した状態を人格のサテライト化現象と呼んだ。また，土井（2008）は，現代の若者のこのような集団への過剰な適応を「優しい関係」と呼び，現代の若者が，互いに傷つく危険を避けるためにコミュニケーションへ没入しあい，過同調にも似た相互協力により，人間関係を儀礼的に希薄な状態に保っていると指摘した。

その場その場をとりつくろうことだけにエネルギーを浪費することは，自己の不全感を強めていくだろう。傷つくことを避けるあまり，本音と建前があまりに乖離したり，どこにも本音を出さないでいることは，他者との親密な関係の形成を阻害することにもなるだろう。最後に紹介した水槽型の言葉のように，ネガティブな感情も含めたさまざまな感情や体験の積み重ねが，豊かな自己の形成には不可欠である。複雑な自己をゆるやかに抱えながらも，他者に左右されすぎない自己の核となる部分を育むことも，青年期の心理的な成熟には重要なのではないだろうか。

最後に，本稿はすでに広く用いられている特定の描画法ではなく，「こころ」を描くという，独自のイメージ画を用いた研究であり，探索的な意味合いが強く，本稿で得られた結果は，仮説生成の段階と位置づけられるだろう。今後，今回得られた仮説をもとに，青年期の内的世界を明確にするために，さらなるイメージ画の実施方法や分析方法の洗練が必要であると考えられる。

引　用　文　献

土井隆義（2008）．友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル　ちくま新書

Erikson, E. H.（1950）．*Childhood and society.* New York: W. W. Norton.
（エリクソン E. H. 仁科弥生（訳）（1977/1980）．幼児期と社会Ⅰ・Ⅱ　みすず書房）

Erikson, E. H.（1959）．Identity and Life Cycle.　Psychological Issue, No. 1. Internationnal University Pres.
（エリクソン E. H.　小此木啓吾（訳）（1974）．自我同一性　誠信書房）

河合隼雄（1982）．中空構造日本の深層　中公叢書

Kegan, R.（1979）．The evolving self: A process conception for ego psychology.　The Counseling Psychologist, 8, 5–38.

Kegan, R.（1982）．The evolving self: Problem and process in human development.　Cambridge, MA: Harvard University Press.

Kegan, R.（1994）．In over our heads: The mental demands of modern life.　MA: Harvard University Press.

Kegan, R., Noam, G. G. & Rogers, L.（1982）．The psychologic of emotion: A neo-Piagetian view.　In D. Cicchetti & P. Hesse（Eds.), New directions for child development. No. 16. Emotional development. San Francisco: Jossey-Bass, pp. 105–128.

Klein, M.（1952）The origins of transference.　Int. J. Psychoanal. 33.　In, The Writings of Melanie Klein, Vol. 3. Hogarth Press, London.（クライン，M.　舘　哲朗（訳）（1985）．転移の起源　メラニー・クライン著作集４　誠信書房）

康　智善（2006）若者の内的世界　氏原　寛・西川隆蔵・康　智善（編著）現代社会と臨床心理学　金剛出版 pp. 54–65.

齋藤　信・杉本英晴・亀田　研・平石賢二（2011）．大学生における自己の構造発達― Kegan の構造発達理

論に基づいて― 青年心理学研究，23，37–54.
鑪幹八郎（2003）．鑪幹八郎著作集Ⅱ 心理臨床と精神分析 ナカニシヤ出版
やまだようこ（1988）．私をつつむ母なるもの―イメージ画にみる日本文化の心理― 有斐閣
Winnicot, D.（1965）．The Maturational Processes and Facilitating Environment. International Universities Press.（ウィニコット，D. W. 牛島定信（訳）（1977）．情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版）

Summary

This paper examined the inner world of the adolescence which appears in image drawing. University students (N=192) drew an image of the mind. The mind drawings were categorized into ten groups; “line”, “separate”, “concentric circler”, “revolve”, “wave”, “unspecialized”, “confusion”, “pressure from outside”, “two-sidedness” and “container”. The results indicate that in adolescence they have a tendency to have over adaptive behavior toward other people and became different depending on the situation. However, this tendency also presents psychological structure of Japanese people that don’t have a core identity and whom are sensitive to others.

Key words: image drawing, adolescence, over adaptive, psychological structure

〔2011. 9．29 受理〕